新編伊勢名所拾遺

へ4
1329
2

利4
1339
2上

新編伊勢名所拾遺集目録 下

風

一山田原　度會郡
一燒出里　一志郡
一蒔繪松　度會郡
一的形
一藤波里　度會郡
一二見浦　度會郡
一藤方　一志郡
一小濱　安藝郡
一山邊御井　鈴鹿郡
一矢野神山
一招板
一藤罷山　度會郡
一二見里　度會郡
一節河　多氣郡
一不斷櫻　安藝郡
一安濃山

一天覚寺　度會郡
一天照山　度會郡
一荒木田　度會郡
一朝熊森　度會郡
一芦浦　度會郡
一阿波羅氣浦　度會郡
一朝明山　朝明郡
一阿古木浦　安濃郡
一綱児之山
一掾宮　度會郡
一朝日宮　度會郡
一荒祭宮　度會郡
一朝熊社　度會郡
一朝熊岳　度會郡
一安養山　度會郡
一朝香山　一志郡
一安濃　安濃郡
一安麻郡
一綱代濱
一西行谷　度會郡

一橋木里　度會郡
一鷺浦　志摩國
一清渚　度會郡
一湯郡盤村　鈴鹿郡
一御裳濯河　度會郡
一御被橋　度會郡
一未多瀬　度會郡
一三渡　一志郡
一真熊野　志摩國
一兜瀬河
一章橋　多氣郡
一伝説橋
一湯田野　度會郡
一宮河　度會郡
一御塩殿　度會郡
一三津浦　度會郡
一御河池　多氣郡
一三重河原　三重郡
一乱橋　志摩國
一御炭山

一塩合濱　度會郡
一下樋小河橋　飯高郡
一白良濱　志摩國
一淀連宮
一岡泥濘
一蛾夷橋　鈴鹿郡
一日永　三重郡
一関河
一酢我鴻　志摩國
一泉水杜　度會郡
一白子濱　安濃郡
一篠間　志摩國
一渋久山
一志加濱
一畫河山　度會郡
一百枝松　度會郡
一鈴鹿山　鈴鹿郡

新編伊勢名所拾遺集下卷

山田原　里

度會郡

山田原ハ小宮御領廛所ニ有
天照豊受皇大神ノ御事ハ上
ニ委しく中ノ巻ニ

新古今
きのふ宮ゐせし時の山田原の杉むらゝ立　西行
同
鈴鹿川ながき木ぬきの山田原の河瀬ゝ流す大工天皇
同
神風や山田の原の榊葉に久しきをぬるゝ白雪　新勅撰
続拾遺
神代より宮ゐ初しの山田原の杉の葉の日ぬる　西園寺入道

親王内親王家にまいるとき

玉葉

神なびの山田の原に苗の色の浦のゆふ波立つ秋の風　順

同

夕日さす山田の原と見渡せば松の梢に苗ごろもかな　藤原為忠

新後古今

稲のはさやかに見えて秋風の吹くにあるかつむらん　後九条前内大臣

歌枕

時鳥ふるとの声ときくやいまだ早苗とるらん　堀川左大臣

御集

夏の日のかりの宿かに流きく山田の原に松の下風　後鳥羽院

同

新田川ふるき流のめくみ風やはらぎもとめ須徳院

壬仁

ふるてにきてやとへ海の一人山田の原に鶴月あり　家隆

千首

新田川流の夏よりぬ時なる山田の松ぞ鳴るらん　為尹

同

村雨に今は山田の波立てはるかに時なる秋の月

神道百首

神風や山田の原に乃ちめ縄なるきせをてとあるの塩　兼邦

建保二年

榊葉の山田にうゑ乃元盛秋の色はなるかぶるはなん　慈鎮

太神宮百六番歌合

万代と山田の原に松の風高く吹なるかるの西行

文永

ふるさとの山田の言も打ひきの山田原に時雨て行　後光明峯寺

同

苗代のとんとはるの山田に里ふたまきの流の六条

同

しるの文林の梅よや里人乃山田の原に梅のつもん　烏家

同

君乃代の山田に里の梅の花能因

正治二年百首

君の代の山田に立ちき乃千度のふるむほもかきし　土御門内大臣

建武元年度會朝棟亭會

夏の日の山田の原に月新乃時るとよひと秋の世に安　荒木田尚政

同

かの日さす山田の原にりの寺に月やとるん　良恵

天文十年太神宮千首

清人乃つむもあり宣法てひろき山田里にあり内大臣

山邊御井　鈴鹿郡

山邊御井ハ石藥師より三町ばかり北ノ山邊ノ道乃ほとりにあり此里人家ノ井ノ清水ハ此清水ハ古人乃所作

人ノ人の硯あらはるれとも所のなれ侍へ

和洞五年四月老長田王ニ下伊勢ノ歌宮

時山邊御集作哥

万葉一

山の人乃御井とみてそ神風やいせのしまらおもふ長田王

文丈

神風やいせのし女花ノ長浜ゆくむ長山の人乃市井家淳

焼出里　一志郡

焼出里ハ茅方雲津ノ郷乃海邊の里なれ共御厨記云焼出

名寺

御厨地九町ト有

晴の浦ノ事ハ此所ニ有ハやきそ塩ノ煙ハ長明

此所野長の伊勢記云いせへ下まろに

やまて入里ハ人ハ海の浦ノ事ハ

ものもの晴ノ所いせ海乃おきれ

濱の雲原はのくあまつそらとのみ思ひ
塩の数とぞ思ひしられける地やまく絵よりけ
るこゝろもとあるとよみ人しらず

夫木
うちなびく人の煙のたなびくやあまの藻塩やきそめ初れば　證心法師

大野神山

万葉十
つまこもる大野の神山霧の色の色づくまでに人丸
新勅撰
乃ぬしなく宿きの色を見るにつけ人の人丸
続拾遺
梓弓やの神山もつきて行
兼倉右大臣
梓弓まさ立ちもぬ大野の神山のはるかに
玉葉
梓弓まさ立ちもぬ大野の神山のはるかに
従三位行能
新千載
秋こゆるしのや霧の大野の神山の
入道前大政大臣
常盤井入道前大政大臣

蒔絵松

二見の浦の村と三津村との間の
山のあなたにまきえの松さいよ
一本の松をさしてゆくしぬ
金葉
玉くしを二見の浦のいさけ蒔絵の松村立
大中臣輔弘

根板

藻塩
まなき板ゆゑと誰か思ふ
的形
万葉一
まとをかの的形の清原の
同
的形の清原清原の浪の
舎人娘子
後人不知

度會郡

家集 榊葉の的形よ潟塩乃ひるあひ[illegible]て 船恒
名寄 人志れぬ秋とそ[illegible]なるあ[illegible]

藤恩山

度會郡

天照穂井と稱し奉る八咫鏡
山乃麓也 往昔此水目向高千
穂峯ニ安置し其後丹波真名
井ニ移し 雄略天皇御宇外宮
御遷幸乃時今此處山ニ移し
奉る也高見乃宮乃跡なり郡よりあり

神祇百首 元長
[illegible]

藤浪里

度會郡

南時藤浪と云里宮川ちかき里ニ
乃ちの民乃ニ沢地村の濤間乃森の西ニ
文川と乃間ニ物ちなしと云所あり新名
所歌合乃絵ニ藤浪里ニ[illegible]
き屋形と写[illegible]藤浪氏居住乃所
と乃し[illegible]

行末とてもいつまでか松はそちきる後浪の里　大中臣定忠

契りをもとくまいかの枝の千世のそかる後浪の里　藤本田尚良

春のきこゆる小野の山あさちよの松原こめてかる後　藤本田成言

元里に雲をせきとめぬちなる花松もまとへん　藤本田延行

宮川の水に雲はなるる松はもまとへん　僧都行寶

宮のや雲の花ちるこゝろぬちなる里　法眼能円

里人やよもせをてちきるん松は花池の水ぬちる　藤本田成忠

寄る代と松もきりてぬちる里入あるもまとを　藤本田長與

こゝ里はあるやおりてくるひん千年はまと松の後浪　藤本田氏行

みちなる雲に行まるぬちなる里のちりに見ぬまを　藤本田紹彩

行末とてもいつまでか松はそちきる後浪の里　大法師良玄

春のきこゆる小野の山あさちよの松原こめてかる後　大法師円親

すまなる松ふむひの里まてもぬるりる後浪の里　藤本田定頼

みちなる松かるぬ名ぬちるみちと　大法師良春

行末とてもいつまでか松はそちきる後浪　大法師号釈

元里に雲をせきとめぬちなる花松もまとへん　大法師良恵

二見里

六郷の抱者と二見と云ひきて二見と
云里なるむ一八七郷ありしよお岩と
ひとて今絶とく所

度會郡

九月ハツカ二見ノ浦ニ侍りける人のもとに
菊に結ぶ柳と一枝おくせられけるつゐでに
夫木 時雨して又も柳に花咲きぬ二見の浦の春の雨 長明
二見ノ浦にまかりてちりきあるべき如法経に十指供養
とてくゝ集まりきて打ちもさるべきたぶらひ
て硯をまゐらせ侍りしかば
夫木 うんけうのきしにあがりてなるゆとをまて
ん せんひとの法花ゆすゝぎてもこの二見の浦に入てけり 長明
月 むらを二見の里に花の入ぬれば月をもとめて戒秀法師
二見浦 沖山潟 慶會郡

金葉 むらを二見の浦に花の入ぬれば月をもとめて源親房
新古今 ゆくすゑ二見の浦より浪に神のこゝろを伸ぶ人 宣方
新勅撰 あま衣ぬれぬ袖にあらねども二見の浦の夢ぞかなしき 家行
新後拾遺 二見の浦にかくれて夢ぞ千年の夢 等侍院贈左大臣
拾遺愚草 むらけの雲に夢の二見の浦に浪に橋なん 定家
月 むらを二見の浦の秋の月 月
月 まひ鶴二見の浦にあられて神風きる花の月 月
月 うめやとをきて袖にやむらを二見の浦に夢も結ぶ 月
拾玉 あのぬとてゆるみをむらを二見の浦の松の村立 慈鎮
月 三見の浦の沖のおきもけん伊勢の海二見の浦の月 月

玉吟
山家集
家清

月

御集
西行

月

後鳥羽院

家集
御集
後鳥羽院

月

家集
重之

月

桑門
御堂関白集
建保御製
讃人下知

西行法師伊勢国二見に行侍りける時二見百首

仰叢曜集
四ねんの春八月十五夜の月を二見の浦にて　家隆
文永
夏の夜の月はいとあけぬるを二見の浦の秋の月哉　同
名所八月二見の浦の鈴虫を　惠度法師
時雨ぬる花も涙の色とこそ　少将内侍
あけぬるかあまの苫屋の秋の月　同院右衛門
玉の緒のたえぬ夢をぞ二見の浦の秋の月　同
あひ思ふ二見の浦の秋の月　後三条院
第九の浦の二見の浪の枕にも　後三条
正治二年百首
霞の色は波の上の春の月　讀人不知
名所
古の大和の山の二見の浦の月　長明

神の上に浪のあはれの月の光　長明
文治六年百首
二見の浦の秋の月　定家
建保
かすみの月の二見の浦の月　後成
月
引きてあはれとまぶる二見の浦の月　知家
二見の浦の月　行家
伊勢の二見の浦の月　康元
宝治二年百首
秋の月の浦の秋の月　後九条内大臣
文應二年百首
二見の浦の秋の月　為家
月

弘安矢詫記云後嵯峨法皇御位時条天
隆通卿　太神宮奏御祈申今夜何
むらきの雲見と祈つ二ちきをとゝ出なん
後嵯峨法皇御製
ゆゝしくも侍きむらけ二見ヶ浦ゝ見あるき
天文十年大神宮十首
月　雲をはらひとゝ出て海原や二見ヶ浦ゝなる月哉　左水門督
浪花ゝとゝ出の雲ゝけ二見ヶ浦の雲ゝあを海乃　四辻宰相中将

笛河　多氣郡

笛河ハ筑紫村ゝ有ゝ絵馬の所ゝ

市町ゝ東ゝ八ちいさき橋を今ゝ笛河
乃橋ゝ申ゝ出ゝ

伊勢物語ゝ出ゝ

散木奇歌集
物ゝ見川ゝ流ゝ石ゝ浪ゝ立ゝ袖ゝ方代ゝ吹ゝ出ゝ　俊頼

建長八年百首奇合
ゝ立ゝ笛ゝ河ゝ　九条内大臣

此歌刻者　実俊朝臣云笛河ゝ出ゝ竹一枝
しゝりてゝ竹ゝ
に龍鳴水中不見已截竹吹之声相似ゝ
文選長笛賦
ゝ今世ゝ是ゝ出ゝ

藤方　里山　　一志郡

津より南へ一里松坂への道也　皇太神御遷幸の時藤方片樋宮にましますと御座ト世記にあり

名寄
ぬれつゝにぬれてきぬらん藤ひし青浪の深みへ下らん　読人不知

建久元年良子内親王家哥合
あらいそも千代のしほよりかよふらん藤かたの浦の　皇后宮下野

夫木
さゝ浪もとえぬる松もまつなはなつむさ藤　好忠

月　類聚
伊勢の海の浦風さえて藤方やあかつき清き夜寒かな　寂念法師

類聚
ひきよせてあはれはかなき松しまのおほさわせよ　光俊

藻塩
ひるさへゆふひある浦さへかちのは浪のかゝるそ藤しろふる

不断桜　　安芸郡

白子の内寺家村白子山観音寺の庭にある桜を不断桜といふ　四季ともに花たえさる
ゆへかくいふなりし　白子の浪の声戦の音す
似るさては浦とつゝきの浦といはやもあらん
ちりひさまいさくら花ふく風もみるへくや常盤なるらし　崇徳院

小濱　　安芸郡

白子より一里北に小濱村といふあり
是なるんの海辺なり

名寄
きのふは小濱の浪そきこゆなる思ふにちよふく風いかにし

天木
猿中

春日山

春日山のゆるしに立藤はなをうしろ　顯仲
まてのうしろ人事とのまねをのやまに

天覚寺

度會郡

天覚寺八二見乃浦より南宮一祢宣荒
木田成長建立地也文治二年乃春比後
崇所重源上人東大寺造宮の夢と蒙
勅支大神宮より大殿若狭名一部を納也
らる外宮乃宿坊八常の寺内宮乃宿坊八天
覚寺貴僧六十口雑人七百余宇五ヶ月

天覚寺より逗留成長神宮参詣せらる其
内一日二見乃浦へ出る京と云人とて僧侶小
童相伴て遊興和歌花を詠ん

二見とは人生の比久人万代まつ浦へ出るとき　小童如意
時ゆ二見乃松ゆ万代まつ人乃ゆうゆ加那　兎王
おもしろ浦乃二見の浦ゆ清ゆ出ゆ　慶尊得業
名ゆ高ゆ二見ゆ浦と添れ心ゆ色ゆ八ゆ　弁慶得業
二見潟ゆ乃岩ゆ代ゆ立れ添てせとゆ流るそ　永惠法師
那の心ゆ八ゆ清ゆ神風や二見の浦ゆ松乃村立　聖玄法師

朝日宮　　度會郡

内宮乃御別宮也とて

伊勢遷宮の年よし作り立まゐ奉

玉葉　神風や勢日の宮乃宮こゝ　鎌倉右大臣

天照山　神宮　　度會郡

天照山五十鈴宮山乃別名也神鏡

廣博記云五十鈴宮乃山名天照山共

鷲日山共云　長原共　神路山共云

所抗　かくしつそむりまそ　後鳥羽院

神祇百首　天照山　元長

荒祭宮　　度會郡

内宮七所別宮第一之御神也

太神宮より北へ十丁ばかり立給へ

後拾遺和歌集云長元元年六月十七日伊

勢のいつき内宮にまいりて侍りけるに雨

はげしくふりきたりて侍りけるに詠宜

親とりくおほやまもる神垂

つゆくにもくれるきりかなしけ

やてゝまませ中の雨はひけ

雨はやはげき雨乃石ぬれ

佛初奉もれ

者ち地ゝむまこすけちの三代ゆすたいはいきまつるすゝ　条主 補親

神宮雜夏記すけ幸と載て荒祭宮云

御詭宣と以為り

荒木田　　度會郡

荒木田とは太神宮御饌田也又田

造氏社荒木田氏祖神天見通命

也先と荒木田宮とゝ云ふ

万葉七　柱ゝねまとゝきたる小田と求んとあやおぬれて川せに

同　神ゝ祭ゝ社樂志けし五十鈴川ある吉代あき異文

同十六　いゝき田の吉田氏橋と食たつてあれうゝしあ　忌部首 黒丸

朝熊社　小朝熊　宮山　　度會郡

朝熊社八六座也此社と小朝熊の社も

朝熊社も境宮ゝ皆同一体也六座八

櫛玉命　保拎止志神　櫻大刀神

苔虫神　大山祇　朝熊水神

續古今　神ゝ祭ゝ恵世ゝ安ぬゝ浪ゝ朝熊入文　京陽門院越前

續拾遺　ゝ生て世へぬゝ朝熊やゝ山ゝ恵ゝ朝月氣　荒木田定季

同　神代ゝ先ゝとゝ朝熊ゝ及ゝ文ゝ世ゝ朝氣　隆弁

月雅　恵ゝ根ゝ榊ゝ浪ゝ花ゝ浪ゝ山ゝ文　祭主定忠

寂延法師小野熊社奉合て人々よみ侍せ

行くるに海辺霞もしらぬ山ぢかなとよ花ぞ

佛堂懐紙集

見わたせば霞も浪も立別て遠ゆく舟に春ぞ

同奉合よ羇旅花とよみ侍

源兵親

同

神風やゆゆしき心ありて思ふ花ぞ

定家

同

旅衣ぬぎ捨てあり白雲の色ふかきをくもの春ぞ

祝部成茂

文永

あさくまの色ひとしほ焼るゝ白浪ぬれぬ春の名

為家

同

熊野やゆ見根ぬ梅を花ぬ花のかゝみの新そ古ぬ

神主尚良

天文十一年太神宮千首

年のうちの日数あさくまの色とそ春の前大納言

参詣記

熊野やとよはたの浦の白ゆきそ春の名

士弗法師

朝熊森　度會郡

熊野（アサクマノ）の林（フモト）乃里と熊野村とゝ

そこにある森と熊野社の東よりとゝ

里古へ小熊野社の東よりとゝ

乃社今は熊野乃岳ぬ葉に侍まわらる

す里人の乃わけ時梅木のまも一所よ集

まるゝそ小熊野社の東よりむり（ヲヲ）熊野村

乃社をさもひるがゝと云又梅木と云田畠

の字と今てはなし

文木

いつ世人の法世よあさ海ぬ塔の身の影や

中務之鎌倉

朝熊岳　連珠池　度會郡

神路山の東北にあり高山也勝
岳山金剛證寺と云が宮まゐりも
と人一里半坂　五十町

古記
日と月乃光を重ねたる池乃ほとりにあり　太神宮御詠
月
いつと無れ釣船乃の絲はなきかひとの乗ぬ川ト月
月
釣人乃世すき者ゆゑ乃言葉上ゆみてとを月
月
ふるそ釣船乃山よりひねりたまの橋乃名書

芦ノ浦　度會郡

二見郷の内村と松下村の間乃浦と

あ乃浦と云ふ古老の伝也

弘長元年百首
漕渡り行尺てゆんいせ伝や寄まゐわする芦乃浦風　常盤井入道

於玉
あ乃浦乃ふきさゆる浪かなりてもあらぬ袖鎮

名寄
風そよ芦乃浦百の葉乃月かゆ尺をてあるそ寄る　真親

安養山　度會郡

二見の郷山田の原村の南乃方西行上人住
給る所也今此寺絶て跡ばかり西行
住給ひ時鴨長明大中臣親忠等と
連歌なとあり　古池乃ほとり
伊勢記云西行法師住給る安養山と

なまくも有けるに連歌なとしける時海邊
落花といふことをよめる
夫木
秋たゝや神路山ハ冬深て嵐のおと楽ハ喜ハ深坂天　長明
阿波羅氣嶋(アハラキケ)　度會郡
あさけ嶋ハいきの浦ハ尺波し也内
宮寺中行事に御濱出(ヲハマイテ)と云事あり
其時此歌をうたふよし世記にあり
濱良岐之嶋(アハラキノ)といふ
神路ハむかひはちいさく七りあなれを
あきをしらぬ草木もおひぬいまの
あり平所しといへるこれ成るへし
夫木
あらきの嶋ハ七浦それなりに気なりもて八嶋　あらきの
朝香山　一志郡
皇太神御遷幸之時阿佐加乃峯に人
をとる伊豆速布留(イツハヤフル)神あり倭姫命稚(クサ)く
の大御手津物(ヲホミテツモノ)をとつけまして其神と阿佐
かれ哉よ社作りて定めて悉めなまる
古記よ見えたり神名帳に壹志郡阿射加(アサカノ)神
社三座とあり松坂より乾方二里阿坂(アサカ)村(ムラ)
万葉八
時しらて落る時雨ハ雨やとて朝香の山乃移ひぬらん　市原王

丈木
いるかしあさゆふかぜのあやにくまよあらくこのなん　常濃光
円
こゑはねあさゆふかぜもたえねとてをのまはのはの俊頼

朝明山

建保三年五月
こえわあるあさあけやまの霧ふかみ　霧　のきそすゝイ　花そ散なる　定家
名寄
ちくさなるのけのこゑのはるのあはれ　行蓮

安濃郡

円
伊勢の海のあはやわかうら浪なれぬあのこゑ　西園寺入道　多
祓風やいせ路とゆふ冬て　あの川原　千ちなの　尊俊
伊勢へくらくらにあのゝいはのはるかて
あうつきにてて田れまに春とこめてゆくて

きりぬのてて道とのくねしよめれ
丈木
打ちこ寺あの漆田はのもかけるとぬ　長明
円
於麻山あり人越て見渡せはみちの浪むあの松原　家長
円
いせの海あはく松原まりてしひ日数よ浪八翠つ　為家
文應元年百首
ちの人の花ちの春いそ春人の萩ちく　円

阿古木浦

安濃郡

津の城下より巽方へ五六町濱道に古墳一
雄横（タイエノキ）一木あり俗に光とあこきの神
といひて阿古木といふ巽人乃禁戒の所を
おりしはあり去つ　連しといひ伝へ

続千載 みくまのきあらきの濱は藻塩草にをつゝて宮浦風 津守國助

新後拾遺 ひすまてよたひを宮ち塩木つむあゝ宮の浦より別 崇金法師

新千載 いなせんあら宮浦はうゝ人てもたひきなれかゝる袖をも 後照念院

同 いらこたんあらき浦よ神あれくつゝや塩木はうきこゝひと 公敏

六帖 きるゝとはいらこ山は網のたひきるは人ゝわすれし 長明

安麻郡

名奇 行幸風に袖も同くなびくわあまよ郡よゆまや塩

網児之山

志摩國英虞郡

万葉四 あこ山の百合かくせる花橘の袖ふれ人の愛しきかも 市原王

家集 塩みて入れるあまの袖ゝらゝ網代乃浦よりゆ中はあし船垣

夫木 あ島ゝやそうち人よあひ見みて網代乃浦にひとゝ見ゆ 讀人不知

度會郡

網代浦

櫛宮

小船能六度の内花開邪姫命御神

靈櫛樹まそ山ゝ櫛宮ゝ

万日本のさゝ乃始也内宮の玄中

に逢毎不あり二の宮居ゝ御本宮へ系

ふ九のゆさる櫛樹ゝ櫛ゝて枝の古に付ゝ

あゝそゝいゝゝつて代ゝよおゝゝまし

後京極
神風の
松玉
をつまてしはの花よりそ
文木
まこ
月
なとも
天文十年太神宮千首
岩
月
かくなつ
西行

ゆ
ま
ん
花
と
ま
ぬ
ま
ん
俊成
ま
に
ま
の
内
へ
て
万里路
中納言
ま
の
花
内大臣
ぬ
の
花
と
ま
ぬ
に
中務
卿宮

西行谷

度會郡

西行谷ハ宇治乃町ノ東の山下也菩

提山西行谷餓鬼谷皆同し山つきなり

しかるに西行上人おりゐたりとそ西

行谷のさま一なれ松あり西行よ

みたる云傳へしるべし

谷のかつに殖わそ松ハ三つ有る所ノ友なきを見

二根集云西行法師世とのれ家ノ戸と

神無ちなんいひ来りもあまてしほけ

ハ谷ノ花も散しまやなりもん圓位也

名のりいそ水も大圓鏡智乃内陣とさ

ゆ
ま
ん

さくらに海の形をんをうつさに墨のもさ
ひみまりをせ作りり

二根集

ことの葉にのこれてもみ花屑も桜枝や久にふん　西三条三光院実隆

桜木里　度會郡

桜木里は絶えくれ釣船何乃浦よ
さくら木と云田畠の字あり むりの
けくてきの里に記ますや

新名所開合

あにのをそちつくまに法つ雲花になり行桜木花里　大中臣定忠

釣船や代すり咲花とたくんそらの桜木の里　荒木田尚良

おの色のあり物とりもて桜木花名に知ますはの雲　荒木田成言

円

桜木とこそ海よりの花とや里花名ならしの雲　荒木田延行

円

雲と入も月乃ひりを花風もおほろに桜木花里　僧都行宝

円

はるかすの雲花よそ海くにひまて花名ちき桜木のさく　法眼能円

円

さくら木花名に知人里の雲風よりねなもとも花のそすす　荒木田成宗

円

花の色と涙こめてもさくら木花さく法師の雲　荒木田長與

円

里人も名桜雲と桜木花実うやあとまん　荒木田氏行

円

咲つく花すほにさくら木花里に雲しかりらさく　大法師良玄

円

とのつつ海ふる木と来とうのれてさくる花桜木の里　荒木田経顕

円

さけとのまのの花花桜ちの名のあくる桜木花と　大法師円親

円

雲と入へとうの花花桜木の花とそ里花名ならの花　荒木田定顕

新名所抄合
たつた川通はまよひ花の盛に見わたす橋本の里

大法師良基

同
橋本の里に流るる紅葉の錦乃川水も花のなごりそ

大法師尊親

同
里ぬしと枝さしてそ見る橋本のあるかのもとの名やなれる

大法師良恵

葦ノ橋　再并橋トモ

多氣郡

葦乃橋八坂〳〵多し〳〵古光の侍る稲木河乃
東に枝殿らて祭使系四の時はしそ枝
あわせ東よ古橋あり光と再并橋らしかそ

名奇
新りき名あもあくるて行さいも乃橋と渡ん

大宰大貳高遠

神祇百首
新里つなと再并橋相逢名を何はしひ乃ゆ

元長

路鳥嶋　志摩國

山家集
路鳥嶋おきの白波たゝ浪乃たゝ波よりて行

西行

佐堀河

作堀乃侍りしもあとの下に伏

万葉四
あこ社山又百重かくせるさて侍そ平てる曳よ

市原王

清渚　渡會郡

清渚　演遍

二見乃浦つゝ今一色村まの松下村まて
乃演と清法とし〳〵形〳〵しけ間よ弓代
打越（ウチコシ）立石（タテイシ）秡侍（ハラヘシ）て清渚乃演也
おなやをつゝひまて伊勢の秋文ま立ぬ

さらだにの女もいとさえのうちなるべし

後撰
人しれぬ乃月はきてとなりて侍き法といてる事ん　ウ將内侍

玉葉
伊勢の海は清き法はさとあはれ浦風はいとよりん　善光寺如來

續後拾遺
いせの海は法も法とは嘉はれ　大俵黒主

新千載
ふせの海や浪乃よりく沈はれ　義詮

于五百番
伊勢海清法は浪のよりて君よりとひらなりり　讃岐

御集
二見潟月ともとをつせの海は清き法の表は　後鳥羽院

夫文
伊勢乃海は法は法は弱ぎめて新はつとに小貝ひろん　師光

円
松ゆは法は清はむ玉さりて君を見まさん法法法は　藤原八束朝臣

伊勢より人乃歌と見せ侍に返事をとて包紙は

續草庵集
伊勢の海乃法は法はなと玉乃玉とあるく光りとあり玉乃玉　頃阿

建保
いせ乃海玉の浦に浪ふりて玉や拾ん法きなはさは　定衡

円
より浪も法は法のとき玉みまてひあり表は紙の秋　俊成女

円
伊勢乃海は法は法は表つ表に表ひは玉を拾ん　兵衛内侍

円
いせ乃海や法は法はなの浪はひるやはひるはひるはひるり　忠守

天文十年大神宮千首
玉ゆとてむして海は行とやは法のうちと玉ろ　三条大納言

湯田野

あけぼの茶店乃南の方に湯田野村

ひろき村は北はあるひろき野は也

度會郡

名寄
伊勢へまかりけるに湯田と云所まてよめる
竹川やゆく雁を見送はさらに山田の原の雲に隠れつ　長明

家集
君かよにゆく雁もなくてひとつひとつちひきよせに後のあへき　俊頼

此哥伊勢の歌合に侍るを此いしかならすの歌合と云事をせさせ給ひしにちひきよせし時よせしと十つかさいしの歌よみさせ給ひし時よそへ侍るとて

湯都盤村（ユツハノ）　鈴鹿郡

関地蔵乃中町より二町程北よ川上（カハカミ）と云所あり是をゆつは村といふ所は昔今の綴てかきむかしはちまの跡もあり

十市皇女参赴於伊勢神宮時見波多横山巌吹黄刀自作歌

万葉一
河上乃ゆつ岩村に草むさすつねにもかもなとこをとめにて　吹黄刀自

続後拾遺
嵐吹川上のけく津原乃ゆつの岩村錦そよけき　法眼行済

玉吟
川上のゆつの岩村乃苔の上下草まても露や深からん　家隆

夫木
数まさる煙や立なり里ことにゆつの岩村は日つの葉をはゐわ　堅阿

同
見渡せは浪も越らし川上のゆつの村よりなひく呉竹　頼氏

名寄
小萩原いつやゆつの村千鳥河上遠く風渡るらん　法師行円

同　文永二年白河殿七百首
川上のゆつも岩村よりぬかりこの里まてハ夕立すせひ
伊勢海人やあさりしらん河上のゆつの村も日く暮ぬ　光俊

宮河

豊宮河　度會郡

山田の町の西の入口より上下に流る
おほけなくも八神領乃支配なりしに
中比よりは故ありて他領乃ものに属
し侍りしを奉行人乃はからひにて領しなし
侍れはあまねくおほしたちてや延宝辰の年
乃比むかしのことく神領になしかへされにし
風雅法ゑ乃杖のしるしにこそと有難くお
あふみかふりさふらふてわたりあるく渡
ちいさ人名あやまちなく文川乃すめる御世もあ
みくにあまねくありかたかり

新古今　後京極摂政殿伊勢勅使之時かへるまいりて
契りありて今日宮川のゆふかつら長き世まても懸てたのまん　定家

続拾遺
わたらひやあふくもたえぬ世浪と清き宮川乃月　後鳥羽院

風雅
君か代の清きためしを宮河の岸乃松村幾よまてかなへし　後京極

新後拾遺
みそきするよそ宮川乃清き流れに松を君そ祈るへき　度會朝勝

月清集
たのむそよ清き流れを宮河の岸乃松村幾代なるらん　後京極

御集
二文川乃清き流れの風よりもうちはらふ浪の萩やちるらん　後鳥羽院

同
春の名をなへて宮河の松の葉に吹くる風の神さひにけり　同

同
冬の夜の風に雲消えて月影さゆる二文川乃秋　同

御集

宮河歌合

外宮神幣記

建武元年度會朝棟亭會

後鳥羽院

西行

度會延春

度會常佑

行遍

兼氣

文川やいつもみそぎれ松風今一入は素風を吹く

流れ出あくるみあらたまはひれ水はかきれ文川のちやはらめ

宮川や清き流に乃そきして秋と今百とせの月

秋とつく神と寄せの文川乃月に入れはまつ月

文川や清き流に新さして秋と今百とせの月

わきてもむ秋はなのもる文川乃の月に新そさ

文川や流乃ふ乃くかそへあくる月とこそ秋やさ

ふるもおのようつそ千年秋とも文川乃月とすのめん

文永乃比伊勢大神宮法楽寺乃松木は

たゆに祝乃ひつ〳〵入おそ神代ちなの

きつきせぬ何上行末もかなるなんす

と思ひつ〳〵

続門葉集

元乃代乃久しきをそうひけ君文川乃れまかし

神祇百首

前權僧正通海

嘗乃と文川乃れ久やしに移ふれかつらさひかそ乃

元長

度會郡

御嘗濯河

鏡乃れ乃乃流乃と乃とそ川乃とい神

前れ乃ふ乃乃流と五十鈴川とい〳〵

御嘗濯川と五十鈴川乃もろ〳〵宮流乃

乃想名なる〳〵清御嘗濯川と号せし

世記日倭姫命御嘗齋計加礼侍弁留於

洗給陪従其以降号御裳濯河也とく

後拾遺　君が代はつきじとぞ思ふ神風やみもすそ河のすまむ限は　民部卿経信

大将に侍りける時勅使にて太神宮にまうでて
よみ侍りける

新古今　神風やみもすそ河のそのかみに契し事の末をたがふな　摂政太政大臣

公卿勅使にてまかりて侍りけるいち志るけむ
ますやめぐくよし侍ける

同　立かへる世とも見るかなみほしきの几みもすそ河の白波　中院入道右大臣

続後撰　千早振神代もおなじかげなれや今もすそ川秋の夜の月　公基

続古今　神風やみもすそ河の流こそ月日とゝもにすむへかりけれ　後京極摂政

玉葉　立かへる世と思ふや神風のみもすそ川の末の流れしる浪　慈鎮

続千載　濁りなき神の心とあふぎつゝ今もすそ川や流遠からん　前右大臣

風雅　朝日さしひかりもそへて川の末見えも果なるへき世の千年　後鳥羽院

同　ゆくとも定めまし後もせめみもすそ河のひとつなの（）　院ノ御製

新千載　神風やみもすそ川の杣柏いはふとなれやまもるなん　神祇伯資茂

同　氷上八嶋の千神路のほぞとも見よそ流れ幾世のす　荒木田守藤

同　わすれても神のみもすそ河の瀬のはや君をとこのの柏（）も志れ　祭主輔親

新拾遺　見ぬ世まで思ひぞすめる神風やみもすそ河の流あふきみぞ　家隆

新続古今　神風やみもすそ川をこえすてて流遠くき君が御代に　宜秋門院丹後

新葉集　照る月よみもすそ河に浮かぶくもにごらぬ浪の底のかげ　後醍醐

御裳濯哥合卷軸

流れ絶ぬ浪にや世をば治むらん神風涼しみもすその岸　西行

御裳濯集

さはひあれ神のたまの花の香にみもすそ河に白ゆふの花　荒木田長光

拾遺愚草

月やどるみもすそ川の岸の秋の末をまつの千とせやあらまし　定家

月

神風やみもすそ川に影さして見ゆるぞやにごらぬ月

月

恵ぬむけれをこと照しみもすそ河にやどる月影

拾遺愚草ニ自西行上人御裳濯河の哥合とりて判すべきよし申せしかば若かりし時すでに此道にゆるしをあたへかちにけるもめづらしく侍しかば八十余付をひとつ

月

山のはの流れよりてもの清やこの君がちぎりぞ千代

月　清

みもすそ流るゝ出月はあまてらす神の宮居の清き河かな　後京極

月

あつまりてやすらはん世もすそ川のなかれの月

月

濁らせも絶ずもの清くみもすそ流れ絶せぬ世をまもる月の月　俊成

長秋

神風やみもすそ河にさしのぼる君が代守る岩をかき

月

神代よりひるき世をわかぬ下をすそ川の清き流の　慈鎮

月

神代よりおほん流や立つみもすそ河のながれの月

月

万代の秋のためしと見るほどのみもすそ川にすめる月影

月

被まもる神やみもすそ河の清き浪

月

神風やみもすそ川の浪はむかし流るゝ月

かさらし世のくにの清み千代みもすそ川の流れまさの世つ　西行

御集
秋風や露の柳の葉をそよがすとても今すそ川まつ
後鳥羽院
同
万代の末とこそ思ふ君が代の千歳の数の
同
みもすそや秋とうつれば秋風の吹きぬ時ぞまづ
同
久しのあまの苫屋しる世にあるもすそ川の千本の
同
白露に荷ふ玉ぬき秋風や吹きぬ時ぞ
同
玉吟
夏引の糸のとぢ目に秋ぞ吹くすそ川の
家隆
御集
万代とみもすそ川の去れあり立ぬ
後鳥羽院
千五百番
秋風や月の光の沈の代の紅葉の
家隆
同
うつろふ色もみもすそ川月新やせばとむ君が
保季
朝臣
君の代の万の数よせん秋風やみもすそ川よ
公経
同
万代とみもすそ川の沈月はそこの代に神そ
隆信
朝臣
君の為人なくみもすそ川と思ふ
家
山家集
物去と白雲の思ひ新をみく月よまるみもすそ
西行
同
みもすそ川の名残よりの長てかすめて立ぬ
夫木
橘の実のみも深く秋風や吹きぬ時ぞ
荒木田延季
同
つの国の世にとこの代かとぞ思ふすそ川のうつろふ
讀人不知
同
むかしの代の人なひくこの月や千代まてかすみ
後三位崇宗
同
とこ春のみもすそ川の早き流の岩ぬ浪もたちぬ
源有仲
同
秋風やみもすそ川のさ浪よ春とあつ浪の糸竹
入道前大政大臣
正治元年十首歌合
秋風やみもすそ川よ春とあつ浪の糸竹
後京極

建保

夏の月を詠しかり金の神風やこもすそ川の清き月 順徳院

月

みそぎすそ川の清き流の上に神代ぞ思ふ夏の月 行意

月

神風やこもすそ川の夕すゝみ君の千とせの秋やまねん 定衡

月

神風の言葉のそなの君と月新清くみをすそ川の流 俊成

月

やゝこなる光はすそ川の夏の月 兵衛門侍

月

こゝ秋とこもすそ川の夕かつゝ君くゝ夕べの流そ清き 忠定

月

とのつゝ夏て清き神風やこもすそ川の春ま九月新 知家

月

夏夜みそぎもそ川の流せにたひくなまもかのねに床そ清き 行能

月

夏らのもの人をすそ川の神風は万代契れあの志ゝ流 康光

天文十二年太神宮十首

後せゝと契りゝ君の言もすそや清てのせれあのそふ上 三条大納言